

# SU(3)型U(1)インスタントンについて

待田 芳徳 (沼津高専)

Yoshinori MACHIDA (Numazu College of Technology)

## 1. はじめに

### 1.1. 束の合成と分解

次の2種類(1),(2)のファイバー束を考える.

(1) 4元 Hopf 束

$$Sp(1)(\cong SU(2) \cong S^3) \longrightarrow S^7 \longrightarrow \mathbb{H}P^1 \cong S^4$$

に対して, 複素 Hopf 束と Penrose 束

$$U(1)(\cong S^1) \longrightarrow S^7 \longrightarrow \mathbb{C}P^3, \quad \mathbb{C}P^1(\cong S^2) \longrightarrow \mathbb{C}P^3 \longrightarrow \mathbb{H}P^1 \cong S^4 :$$

$$\begin{array}{ccc}
 & S^7 & \\
 & \searrow^{U(1)} & \\
 Sp(1) \downarrow & & \mathbb{C}P^3 \\
 & \swarrow_{\mathbb{C}P^1} & \\
 & S^4 & 
 \end{array}$$

(2)  $V = \mathbb{C}^3$  での 1, 2 次元部分空間の旗多様体  $F_{12} = SU(3)/U(1) \times U(1)$  を考えて,  $\mathbb{C}P^2 = SU(3)/S(U(2) \times U(1))$ ,  $N^7 = SU(3)/U(1)$  として,

$$Sp(1)(\cong SU(2) \cong S^3) \longrightarrow N^7 \longrightarrow \mathbb{C}P^2$$

に対して,

$$U(1)(\cong S^1) \longrightarrow N^7 \longrightarrow F_{12}, \quad \mathbb{C}P^1(\cong S^2) \longrightarrow F_{12} \longrightarrow \mathbb{C}P^2 :$$

$$\begin{array}{ccc}
 & N^7 & \\
 & \searrow^{U(1)} & \\
 Sp(1) \downarrow & & F_{12} \\
 & \swarrow_{\mathbb{C}P^1} & \\
 & \mathbb{C}P^2 & 
 \end{array}$$

を考えると, (1),(2)とも互いにファイバー束の合成, 分解になっている. それらの上の接続についても同様なことがいえるが, 特別なクラス同志, 特に, よく知られた  $S^4, \mathbb{C}P^2$  上の  $Sp(1)$

インスタントンに対して、それぞれ  $\mathbb{C}P^3$ ,  $F_{12}$  上の「 $U(1)$  インスタントン」の対応やモジュライについてはどうであろうか。

## 1.2. $U(1)$ ゲージ場

ここで、通常のインスタントンは Hodge の  $*$  作用素からの自己双対性に基づくので、4次元多様体上の束でしか定義されない。 $U(1)$  Yang-Mills 接続は Yang-Mills 汎関数の臨界点として任意次元の多様体  $M$  上の  $U(1)$  束で定義されるが、モジュライ空間は商空間  $H^1(M; \mathbb{R})/H^1(M; \mathbb{Z})$  と 1 対 1 対応するため、単連結な  $\mathbb{C}P^3$ ,  $F_{12}$  では自明なものしか存在しない [M-I].

ここでは、6次元多様体上に幾何構造としての  $SU(3)$  構造 (特に, nearly Kähler 構造) を考え、そのもとで自然に定義される主  $U(1)$  束上にインスタントンを考える。それを、 $S^4$ ,  $\mathbb{C}P^2$  のそれぞれツイスター空間である  $\mathbb{C}P^3$ ,  $F_{12}$  に適用してみることを考える。

6次元 nearly Kähler 多様体  $(M^6, g, J, \omega, \Phi = \phi + i\psi)$  上の  $SU(3)$  型  $U(1)$  インスタントン  $A$  の議論は、M理論コンパクト化でのタイプ IIA 背景空間における NS-NS 場の計量  $g$ , 2-形式  $\omega$  と R-R 場の 3-形式  $\Phi = \phi + i\psi$ ,  $S^1$  束からのゲージポテンシャルである 1-形式  $A$ , 場の強さ  $R_A$  が登場人物として展開する話である。

## 2. $SU(3)$ 構造, 特に, nearly Kähler 構造

### 2.1. $U(n)$ 構造

$2n$ 次元多様体  $M^{2n}$  に対して、 $g$  を Riemann 計量,  $J$  を  $g(JX, JY) = g(X, Y)$  となる複素構造,  $\omega$  を  $\omega(X, Y) = g(JX, Y)$  となる基本 2-形式を考える。そのとき、 $M$  は概 Hermitian 構造,  $U(n)$  構造をもつという。3つのうち2つを与えれば、他の1つは定まる。 $g$  の Levi-Civita 接続  $\nabla$  に対して、 $\nabla J = 0$  ( $\nabla \omega = 0$ ) のとき、構造は可積分 (捩率 0, 平坦) といい、Kähler であるという。

$M$  の各点で次の  $U(n)$  既約分解をもつ ([C-S], [Sa]) :  $T^* = T^*M, \Lambda^* = \Lambda^*T^*M$  として、

$$\begin{aligned} T^* &\cong [\Lambda^{1,0}], \\ \Lambda^2 T^* &\cong [\Lambda^{2,0}] \oplus [\Lambda_0^{1,1}] \oplus \mathbb{R}, \\ \Lambda^3 T^* &\cong [\Lambda^{3,0}] \oplus [\Lambda_0^{2,1}] \oplus T^*, \\ &\vdots \end{aligned}$$

ここで、 $T_{\mathbb{C}}^* = T^*M \otimes_{\mathbb{R}} \mathbb{C}$  として、

$$\begin{aligned} \Lambda^r T_{\mathbb{C}}^* &= \bigoplus_{p+q=r} \Lambda^{p,q}, [\Lambda^{p,q}] \otimes_{\mathbb{R}} \mathbb{C} = \Lambda^{p,q} \oplus \Lambda^{q,p}, [\Lambda^{p,p}] \otimes_{\mathbb{R}} \mathbb{C} = \Lambda^{p,p}, \\ \Lambda^1 &= [\Lambda^{1,0}], \Lambda^1 + i\Lambda^1 = \Lambda^1 \otimes_{\mathbb{R}} \mathbb{C} = \Lambda^{1,0} \oplus \Lambda^{0,1}, \\ \Lambda_{\mathbb{C}}^2 &= \Lambda^{2,0} \oplus \Lambda^{1,1} \oplus \Lambda^{0,2}, \Lambda^2 = [\Lambda^{2,0}] \oplus [\Lambda^{1,1}] = [\Lambda^{2,0}] \oplus [\Lambda_0^{1,1}] \oplus \mathbb{R}. \end{aligned}$$

最後の式は、 $\Lambda^2 = \mathfrak{so}(2n)$ ,  $[\Lambda^{2,0}] = \mathfrak{u}(n)^\perp$ ,  $\Lambda^{1,1} = \mathfrak{u}(n)$ ,  $[\Lambda_0^{1,1}] = \mathfrak{su}(n)$ ,  $\mathbb{R} = \langle \omega \rangle$  と同一視される。

### 2.2. $SU(n)$ 構造

$U(n)$  構造をもつ  $2n$  次元多様体  $M$  に対して,  $M$  の各点で 2 次元  $[\Lambda^{n,0}]$  の単位円  $S^1$  をファイバーとする単位 (実) 標準束  $B$  を考える:

$$\begin{array}{ccc} B & \longleftarrow & S^1 \subset [\Lambda^{n,0}] \\ & & \downarrow \\ & & M \end{array}$$

この束の切断を指定するとき,  $M$  は  $SU(n)$  構造をもつという ([C-S], [Sa]). 束  $B$  は主  $S^1$  束だから, そのとき自明束である. 可積分な  $U(n)$  構造のときは Calabi-Yau といい, Ricci 平坦な Kähler である.

$SU(n)$  構造をもつことは実  $n$ -形式  $\phi$  を指定することであり, 付随する  $(n, 0)$ -形式

$$\Phi = \phi + i\psi, \quad \psi = J\phi$$

が定義される. 束  $B$  の各ファイバーは,

$$S^1 = \{a\phi + b\psi \mid a^2 + b^2 = 1\} \subset [\Lambda^{n,0}]$$

である.

### 2.3. $SU(3)$ 構造

6 次元について考える.  $U(3)$  構造から  $SU(3)$  構造への簡約は局所的に存在する:  $\{e^1, \dots, e^6\}$  を  $T^*$  での局所的な正規直交基底場とすると,  $Je^1 = -e^2$ ,  $Je^3 = -e^4$ ,  $Je^5 = -e^6$  であり,

$$\begin{aligned} \omega &= e^1 \wedge e^2 + e^3 \wedge e^4 + e^5 \wedge e^6, \\ \Phi &= (e^1 + ie^2) \wedge (e^3 + ie^4) \wedge (e^5 + ie^6) \\ &= e^{135} - e^{146} - e^{236} - e^{245} + i(e^{136} + e^{145} + e^{235} - e^{246}) \\ &= \phi + i\psi, \end{aligned}$$

ここで  $e^{ijk} = e^i \wedge e^j \wedge e^k$ , である. そのとき,

$$\omega \wedge \phi = 0, \quad \omega \wedge \psi = 0, \quad \phi \wedge \psi = \frac{2}{3}\omega^3$$

を満たす.

### 2.4. nearly Kähler 構造

$U(n)$  構造をもつ  $2n$  次元多様体  $(M, g, J, \omega)$  が nearly Kähler であるとは, Levi-Civita 接続  $\nabla$  に対して  $(\nabla_X J)X = \nabla_X JX - J\nabla_X X = 0$  ( $X \in TM$ ) を満たすときをいう. 特に,  $\nabla J = 0$  のときは Kähler である, 以後 non Kähler とする.

6 次元のときの性質としては ([C], [C-S]),

- (i) 標準束  $K$  は自明, 即ち, 第 1 Chern 類  $c_1(M) = 0$ , ( $2n$  次元でもよい)
- (ii) 正の Einstein, 従って完備ならばコンパクト,
- (iii) 計量錐  $C(M)$ :  $dr^2 + r^2g$  は  $G_2$  ホロノミーをもつ,

(iv) 等質空間は次の4つである： $S^6, \mathbb{C}P^3, F_{12}, S^3 \times S^3$ .

さらに,

$$d\omega = 3\nabla\omega \in [\Lambda^{3,0}]$$

が成り立つ。大事なことは、基本2-形式 $\omega$ と複素体積形式 $\Phi = \phi + i\psi \in \Lambda^{3,0}$ が存在して,

$$d\omega = 3\phi \ (\Rightarrow d\phi = 0), \quad d\psi = -2\omega \wedge \omega \ (\Rightarrow d(\omega \wedge \omega) = 0)$$

を満たすことであり、 $SU(3)$ 構造を定義する。 $(\nabla_X J)Y + (\nabla_Y J)X = 0$ に注意して,

$$\phi(X, Y, Z) = g((\nabla_X J)Y, Z), \quad \psi(X, Y, Z) = g((\nabla_X J)Y, JZ) \in [\Lambda^{3,0}]$$

とすればよい。

### 3. $SU(3)$ 型インスタントン

#### 3.1. $SU(3)$ 型インスタントン

$SU(3)$ 型インスタントンを定義する前に、通常の4次元多様体上の束のインスタントンを復習して、 $SU(3)$ 型インスタントンの定義の自然さ、類似性をみる一助としよう。

向き付けられた4次元 Riemann 多様体  $N$  での2-形式の空間  $\Lambda^2 \cong \mathfrak{so}(4)$  の  $SO(4)$  既約分解

$$\Lambda^2 = \Lambda_+^2 \oplus \Lambda_-^2, \quad \mathfrak{g} = \mathfrak{su}(2)_+ \cong \Lambda_+^2, \quad \mathfrak{g}^\perp = \mathfrak{su}(2)_- \cong \Lambda_-^2$$

を考える。これは、Hodge の  $*$  作用素の  $\pm 1$  の固有分解でもある。

$P$  をコンパクト半単純 Lie 群  $H$  を構造群とする  $N$  上の主束とし、その上の接続形式  $A$  の曲率形式  $R_A$  が,

$$R_A \in \Gamma(\text{ad}P \otimes \Lambda_+^2) (\subset \Gamma(\text{ad}P \otimes \Lambda^2))$$

$(\text{ad}P = P \times_{\text{Ad}} \mathfrak{h})$  を満たすとき、 $P$  上の  $A$  をインスタントンという。そのとき、インスタントン  $A$  に対する楕円複体

$$0 \longrightarrow \Gamma(\text{ad}P \otimes \Lambda^0) \xrightarrow{D_0} \Gamma(\text{ad}P \otimes \Lambda^1) \xrightarrow{D_1} \Gamma(\text{ad}P \otimes \Lambda_-^2) \longrightarrow 0$$

ができる、ここで  $D_0 = D_A$ ,  $D_1 = p_- \circ D_A$  は共変外微分 ( $p_- : \Lambda^2 \rightarrow \Lambda_-^2$  は直交射影) である。

$N$  が  $U(2)$  構造 (概 Hermite 構造) をもつとき、 $\Lambda^2$  の  $U(2)$  既約分解

$$\Lambda^2 = [\Lambda^{2,0}] \oplus \langle \omega \rangle \oplus [\Lambda_0^{1,1}], \quad \Lambda_+^2 = [\Lambda^{2,0}] \oplus \langle \omega \rangle, \quad \Lambda_-^2 = [\Lambda_0^{1,1}]$$

をもつ。そのとき、 $A$  として反インスタントンのほうを考える：

$$R_A \in \Gamma(\text{ad}P \otimes \Lambda_-^2).$$

次に、 $U(3)$  構造 (概 Hermite 構造) をもつ6次元多様体  $M$  での2-形式の空間  $\Lambda^2 \cong \mathfrak{so}(6)$  の  $U(3)$  既約分解

$$\Lambda^2 = [\Lambda^{2,0}] \oplus \langle \omega \rangle \oplus [\Lambda_0^{1,1}], \quad \mathfrak{g}^\perp = [\Lambda^{2,0}] \oplus \langle \omega \rangle, \quad \mathfrak{g} = \mathfrak{su}(3) \cong [\Lambda_0^{1,1}]$$

を考える.

$P$  を  $M$  上の主  $H$  束とする :

$$\begin{array}{ccc} H & \longrightarrow & P \\ & & \downarrow \\ & & M \end{array}$$

その上の接続形式  $A$  の曲率形式  $R_A$  が,

$$R_A \in \Gamma(\text{ad}P \otimes \mathfrak{g}) (\subset \Gamma(\text{ad}P \otimes \Lambda^2))$$

を満たすとき,  $P$  上の  $A$  を  $SU(3)$  型  $H$  インスタントンという ([C]). そのとき, インスタントン  $A$  に対する系列

$$0 \rightarrow \Gamma(\text{ad}P \otimes \Lambda^0) \xrightarrow{D_0} \Gamma(\text{ad}P \otimes \Lambda^1) \xrightarrow{D_1} \Gamma(\text{ad}P \otimes ([\Lambda^{2,0}] \oplus \langle \omega \rangle)) \xrightarrow{D_2} \Gamma(\text{ad}P \otimes [\Lambda^{3,0}]) \rightarrow 0$$

は楕円的となる.  $M$  が可積分な  $U(3)$  構造, 即ち, Kähler であるか, または, nearly Kähler であるとき, 系列は複体となる. そのとき,  $M$  がさらにコンパクトならば, Atiyah-Singer の指数定理が適用できる.  $M$  を,  $P$  上の  $SU(3)$  型  $H$  インスタントン全体の集合の  $P$  のゲージ変換群による商空間であるモジュライ空間とする. そのとき,  $SU(3)$  型  $H$  インスタントンの変形モジュライ  $T_A \mathcal{M}$  は,  $H^1 = \text{Ker} D_1 / \text{Im} D_0$  で与えられる.

### 3.2. 作用積分と運動方程式

6次元 nearly Kähler 多様体  $(M^6, g, J, \omega, \Phi = \phi + i\psi)$  を考える:  $d\omega = 3\phi$ ,  $d\psi = -2\omega^2$ .  $P$  を  $M$  上の主  $H$  束とする.

#### 命題

$A$  が  $SU(3)$  型  $H$  インスタントンである:  $R_A \in \Gamma(\text{ad}P \otimes \mathfrak{su}(3))$

$\iff$  (運動方程式)  $R_A \wedge \phi = 0$ ,  $R_A \wedge \omega^2 = 0$

$\iff$  (作用積分)  $S(A) = \int_M \text{Tr}(A \wedge dA + \frac{2}{3} A^3) \wedge \Phi$  の臨界点である.

$A_t = A + t\alpha$  ( $\alpha \in \Gamma(\text{ad}P \otimes \Lambda^1)$ ) に対して,

$$\left. \frac{dS(A_t)}{dt} \right|_{t=0} = 2 \int_M \text{Tr}(R_A \wedge \alpha) \wedge \Phi$$

となり, 臨界点は  $R_A \wedge \phi = 0$ ,  $R_A \wedge \psi = 0$  で特徴づけられる.

3次元多様体の場合の Chern-Simons 汎関数の作用積分と同様に, この作用積分はゲージ不変ではない.  $\Phi$  のかわりに実部  $\phi$  をとって作用積分  $S_{re}(A) = \int_M \text{Tr}(A \wedge dA + \frac{2}{3} A^3) \wedge \phi$  を考え,  $H = U(1)$ , あるいは  $CP^3, F_{12}$  のような  $H^3 = 0$  であれば, ゲージ不変となる.

## 4. ツイスター理論

### 4.1. 一般論

向き付けられた 4次元 Riemann 多様体  $(N, h)$  の  $T_x N (x \in N)$  での正の直交複素構造全体

$$Z_x = \{J \in \text{End}(T_x N) \mid J^2 = -\text{id}, h(JX, JY) = h(X, Y), J \gg 0\} \cong S(\Lambda^2) \cong SO(4)/U(2) \cong CP^1$$

をファイバーとする  $N$  上のツイスター空間  $Z = Z(N) = \bigcup_{x \in N} Z_x$  を考える. 射影を  $\pi: Z \rightarrow N$  とする.  $TZ$  を,  $h$  の Levi-Civita 接続による水平リフト  $H$  とファイバー  $\mathbb{C}P^1$  に接する垂直成分  $V$  に分解する:  $TZ = H \oplus V$ . そのとき, 次が知られている ([B], [Sa]).

$Z$  上の概複素構造  $J$  を,  $H$  上ではトートロジカルな  $J^h$ ,  $V$  上では  $\mathbb{C}P^1$  からの標準的な  $J^v$  をとることによって定義する:  $J = J^h \oplus J^v$ .

**命題** ツイスター空間  $Z$  の概複素構造  $J$  が積分可能である  $\iff N$  が半共形的平坦 ((反) 自己双対的) である.

**命題** コンパクトな  $N$  のツイスター空間  $Z$  が Kähler である  $\iff$  半共形的平坦な  $N$  が正の Einstein である  $\iff N$  が  $S^4, \mathbb{C}P^2$  である.

#### 4.2. $Z(S^4)$ と $Z(\mathbb{C}P^2)$

$N$  を  $S^4, \mathbb{C}P^2$  とする. それぞれのツイスター空間  $Z$  は  $\mathbb{C}P^3, F_{12}$  である.  $Z$  上の概複素構造に対して ([E-S], [Sa], [H]),

**命題** 通常の  $J_1 = J^h \oplus J^v$  は積分可能である, 一方  $J_2 = J^h \oplus -J^v$  は積分可能ではない.

**命題**  $Z$  上の Riemann 計量を  $g_t = \pi^*h + th^v (t > 0)$  とすると,  $t = t_1 = 12/\tau, t = t_2 = 6/\tau$  ( $\tau$  は Einstein な  $N$  の正のスカラー曲率) のとき,  $g$  は Einstein である, そして  $(g_1 = g_{t_1}, J_1, \omega_1)$  は Einstein-Kähler,  $(g_2 = g_{t_2}, J_2, \omega_2)$  は nearly Kähler である.

### 5. $\mathbb{C}P^3$ と $F_{12}$ での $SU(3)$ 型 $U(1)$ インスタントン

#### 5.1. $\mathbb{C}P^3$ の場合

nearly Kähler な  $(\mathbb{C}P^3, g_2, J_2, \omega_2, \Phi = \phi + i\psi)$  を考える.  $(\mathbb{C}P^3, g_1, J_1, \omega_1)$  は Einstein-Kähler であることに注意する.  $\mathbb{C}P^3$  上で複素 Hopf 束による  $SU(3)$  型  $U(1)$  インスタントンを考える:

$$\begin{array}{ccc} U(1) & \longrightarrow & S^7 \\ & & \pi \downarrow \\ & & \mathbb{C}P^3 \end{array}$$

Einstein-Kähler な  $(\mathbb{C}P^3, g_1, J_1, \omega_1)$  での Kähler 形式  $\omega_1$  は,  $\omega_1 \in \Lambda_0^{1,1}(J_2)$ , 即ち,  $\omega_1 \in \langle \omega_2 \rangle^\perp \subset \Lambda^{1,1}(J_2)$  である. 従って,  $\omega_1$  を  $\pi$  によって引き戻した曲率をもつ接続  $A$  は,  $SU(3)$  型  $U(1)$  インスタントンであることがわかる:

$$R_A = \pi^*\omega_1 \in \Gamma(\text{ad}S^7 \otimes \Lambda_0^{1,1}(J_2)).$$

これを基礎インスタントンとして, BPST 構成の類似の方法によって ([M-I], [K]), 中心の位置と強さのスケールによる  $6+3=9$  次元パラメーターをもつ  $SU(3)$  型  $U(1)$  インスタントンを構成する.

次の図式を考える:

$$\mathbb{H}^* \longrightarrow \mathbb{H}^2 - \{0\} = \mathbb{C}^4 - \{0\} \longleftarrow \mathbb{C}^*$$

∪

$$\begin{array}{ccccc}
 Sp(1) & \longrightarrow & S^7 & \longleftarrow & U(1) \\
 & & \downarrow & \swarrow & \searrow \\
 & & \mathbb{H}P^1 & & \mathbb{C}P^3 \longleftarrow \mathbb{C}P^1
 \end{array}$$

$\mathbb{H}^2 = \mathbb{C}^4 = \mathbb{R}^8$  での標準座標を  $\mathbb{H}^2 : (q_0, q_1)$ ,  $\mathbb{C}^4 : (z_0, z_1, z_2, z_3)$  とする.  $\mathbb{C}^4 - \{0\}$  上の 1-形式

$$\theta = \frac{1}{|z|^2} \sum_{i=0}^3 \bar{z}_i dz_i$$

を  $S^7$  上に制限すると,  $u(1)$ -値 1-形式であり,  $\mathbb{C}P^3$  の主  $U(1)$  束  $S^7$  上の接続を定義する.  $S^7 \rightarrow \mathbb{C}P^3$  の  $U_0$  上の切断  $z \mapsto \left( \frac{1}{\sqrt{1+|z|^2}}, \frac{z_1}{\sqrt{1+|z|^2}}, \frac{z_2}{\sqrt{1+|z|^2}}, \frac{z_3}{\sqrt{1+|z|^2}} \right)$  によって,  $\theta$  を  $U_0$  に引き戻すと,

$$\theta_{U_0} = \text{Im} \left( \frac{1}{1+|z|^2} \sum_{i=1}^3 \bar{z}_i dz_i \right),$$

ここで,  $U_0 = \{[z_0, z_1, z_2, z_3] \mid z_0 \neq 0\} \subset \mathbb{C}P^3$ ,  $z = [1, z_1, z_2, z_3] = (z_1, z_2, z_3)$  とする. 曲率を  $U_0$  上でみてみると,

$$\begin{aligned}
 \omega_{U_0} &= d\theta_{U_0} \\
 &= \frac{1}{1+|z|^2} \sum_{i=1}^3 d\bar{z}_i \wedge dz_i - \frac{1}{(1+|z|^2)^2} \sum_{i < j} (z_i \bar{z}_j d\bar{z}_i \wedge dz_j)
 \end{aligned}$$

となり,  $\mathbb{C}P^3$  での Kähler 形式  $\omega_1$  の非同次座標表示にほかならない.

$a = (a_1, a_2, a_3) \in U_0 = \mathbb{C}^3 \subset \mathbb{C}P^3$ ,  $\lambda = (\lambda_1, \lambda_2, \lambda_3) \in \mathbb{R}^3$  ( $\lambda_i > 0$ ) に対して,

$$\theta_{(a_i, \lambda_i)} = \text{Im} \left( \frac{1}{1 + \sum_{i=1}^3 \lambda_i^2 |z_i - a_i|^2} \sum_{i=1}^3 \lambda_i^2 (\bar{z}_i - \bar{a}_i) dz_i \right)$$

とおくことによって,  $\omega_{(a_i, \lambda_i)} = d\theta_{(a_i, \lambda_i)}$  を  $\pi$  によって引き戻した曲率をもつ接続  $A_{(a_i, \lambda_i)}$  は,  $6 + 3 = 9$  次元パラメーターをもつ  $SU(3)$  型  $U(1)$  インスタントンである. 以下の 5.3. Atiyah-Singer の定理を適用して, 次がわかる.

**定理** 上のように構成した  $\mathbb{C}P^3$  の主  $U(1)$  束  $S^7$  上の接続  $A_{(a, \lambda)}$  ( $(a, \lambda) \in \mathbb{C}P^3 \times \mathbb{R}_+^3$ ) は, 9 次元パラメーターをもつ  $SU(3)$  型  $U(1)$  インスタントンである.

## 5.2. $F_{12}$ の場合

nearly Kähler な  $(F_{12}, g_2, J_2, \omega_2, \Phi = \phi + i\psi)$  を考える.  $(F_{12}, g_1, J_1, \omega_1)$  は Einstein-Kähler であることに注意する.  $F_{12}$  上で  $SU(3)$  型  $U(1)$  インスタントンを考える:

$$\begin{array}{ccc}
 U(1) & \longrightarrow & N^7 \\
 & & \pi \downarrow \\
 & & F_{12}
 \end{array}$$

Einstein-Kähler な  $(F_{12}, g_1, J_1, \omega_1)$  での Kähler 形式  $\omega_1$  は,  $\omega_1 \in \Lambda_0^{1,1}(J_2)$ , 即ち,  $\omega_1 \in \langle \omega_2 \rangle^\perp \subset \Lambda^{1,1}(J_2)$  である. 従って,  $\omega_1$  を  $\pi$  によって引き戻した曲率をもつ接続  $A$  は,  $SU(3)$  型  $U(1)$  インスタントンであることがわかる:

$$R_A = \pi^* \omega_1 \in \Gamma(\text{ad}N^7 \otimes \Lambda_0^{1,1}(J_2)).$$

Donaldson 構成の類似の方法によって ([D]),  $SU(3)$  型  $U(1)$  インスタントンを構成する.  
自然な埋め込み

$$\begin{array}{ccc} S^{11} \leftarrow N^7 & & \\ \downarrow & \searrow & \\ & & F_{12} \subset \mathbb{C}P^2 \times \mathbb{C}P^{2*} \hookrightarrow \mathbb{C}P^5 \\ & \swarrow & \\ \mathbb{H}P^2 \leftarrow \mathbb{C}P^2 & & \end{array}$$

のもとで, 次の図式を考える:

$$\begin{array}{ccccc} \mathbb{H}^* \longrightarrow \mathbb{H}^3 - \{0\} = \mathbb{C}^6 - \{0\} \longleftarrow \mathbb{C}^* & & & & \\ \cup & & & & \\ Sp(1) \longrightarrow S^{11} \longleftarrow U(1) & & & & \\ \downarrow & \searrow & & & \\ & & \mathbb{C}P^5 \longleftarrow \mathbb{C}P^1 & & \\ & \swarrow & & & \\ & & \mathbb{H}P^2 & & \end{array}$$

$\mathbb{H}^3 = \mathbb{C}^6 = \mathbb{R}^{12}$  での標準座標を  $\mathbb{H}^3 : (q_0, q_1, q_2)$ ,  $\mathbb{C}^6 : (z_0, z_1, z_2, z_3, z_4, z_5)$  とする.  $\mathbb{C}^6 - \{0\}$  上の 1-形式

$$\theta = \frac{1}{|z|^2} \sum_{i=0}^5 \bar{z}_i dz_i$$

を  $S^{11}$  上に制限すると,  $u(1)$ -値 1-形式であり,  $\mathbb{C}P^5$  の主  $U(1)$  束  $S^{11}$  上の接続を定義する.  $S^{11} \rightarrow \mathbb{C}P^5$  の  $U_0$  上の切断  $z \mapsto \left( \frac{1}{\sqrt{1+|z|^2}}, \frac{z_1}{\sqrt{1+|z|^2}}, \frac{z_2}{\sqrt{1+|z|^2}}, \frac{z_3}{\sqrt{1+|z|^2}}, \frac{z_4}{\sqrt{1+|z|^2}}, \frac{z_5}{\sqrt{1+|z|^2}} \right)$  によって,  $\theta$  を  $U_0$  に引き戻すと,

$$\theta_{U_0} = \text{Im} \left( \frac{1}{1+|z|^2} \sum_{i=1}^5 \bar{z}_i dz_i \right),$$

ここで,  $U_0 = \{[z_0, z_1, z_2, z_3, z_4, z_5] \mid z_0 \neq 0\} \subset \mathbb{C}P^5$ ,  $z = [1, z_1, z_2, z_3, z_4, z_5] = (z_1, z_2, z_3, z_4, z_5)$  とする. 曲率を  $U_0$  上でみると,

$$\begin{aligned} \omega_{U_0} &= d\theta_{U_0} \\ &= \frac{1}{1+|z|^2} \sum_{i=1}^5 d\bar{z}_i \wedge dz_i - \frac{1}{(1+|z|^2)^2} \sum_{i < j} (z_i \bar{z}_j d\bar{z}_i \wedge dz_j) \end{aligned}$$

となり,  $\mathbb{C}P^5$  での Kähler 形式  $\omega$  の非同次座標表示にほかならない.

$\mathbb{C}P^5$  での Kähler 形式  $\omega$  の埋め込み  $i: F_{12} \subset \mathbb{C}P^2 \times \mathbb{C}P^{2*} \hookrightarrow \mathbb{C}P^5$  からの引き戻しが,  $F_{12}$  での Kähler 形式  $\omega_1$  にほかならない:  $\omega_1 = i^* \omega$ .



$CP^5$  の主  $U(1)$  束  $S^{11}$  上の接続  $\theta$  を, 埋め込み  $i$  から引き戻すことによって,  $F_{12}$  の主  $U(1)$  束  $N^7$  上に上記の接続  $A$  が定義される:  $A = i^*\theta$ ,  $R_A = \pi^*\omega_1 = \pi^*i^*\omega$ .

$CP^3$  の場合と同様に,  $F_{12}$  上に  $\theta, A$  から中心の位置と強さのスケールによる  $6+3=9$  次元パラメーターの  $SU(3)$  型  $U(1)$  インスタントン  $A_{(a_i, \lambda_i)}$  が構成できる.

さらに, 複素 Hopf 束を考える:

$$\begin{array}{ccc} U(1) & \longrightarrow & S^5 \\ & & \pi \downarrow \\ & & CP^2 \end{array}$$

$CP^2$  上の Kähler 形式  $\omega$  を  $S^5$  に引き戻した曲率をもつ  $S^5$  上の接続  $\theta$  から,  $CP^3$  の場合と同様に,  $b = (b_1, b_2) \in U_0 = \mathbb{C}^2 \subset CP^2$ ,  $\mu = (\mu_1, \mu_2) \in \mathbb{R}^2$  ( $\mu > 0$ ) に対して, 中心の位置と強さのスケールによる接続  $\theta_{(b_i, \mu_i)}$  ができる. 束  $\varpi: F_{12} \rightarrow CP^2$  による引き戻し  $\varpi^*\theta_{(b_i, \mu_i)}$  によって,  $F_{12}$  上に 6 次元パラメーターの  $SU(3)$  型  $U(1)$  インスタントン  $B_{(b_i, \mu_i)}$  が構成できる. 以下の 5.3. Atiyah-Singer の定理を適用して, 次がわかる.

**定理** 上のように構成した  $F_{12}$  の主  $U(1)$  束  $N^7$  上の接続  $A_{(a, \lambda)}$  ( $(a, \lambda) \in F_{12} \times \mathbb{R}_+^3$ ) と  $B_{(b, \mu)}$  ( $(b, \mu) \in CP^2 \times \mathbb{R}_+^2$ ) は, 15 次元パラメーターをもつ  $SU(3)$  型  $U(1)$  インスタントンである.

### 5.3. Atiyah-Singer の指数定理の適用

$M$  をコンパクトな 6 次元 nearly Kähler 多様体とし,  $P$  をコンパクト半単純 Lie 群  $H$  を構造群とする  $M$  上の主束とする. 3.1. の話から,  $A$  が  $P$  上の  $SU(3)$  型  $H$  インスタントンのとき,  $A$  に対する楕円複体の系列ができる:

$$0 \rightarrow \Gamma(\text{ad}P \otimes \Lambda^0) \xrightarrow{D_0} \Gamma(\text{ad}P \otimes \Lambda^1) \xrightarrow{D_1} \Gamma(\text{ad}P \otimes ([\Lambda^{2,0}] \oplus \langle \omega \rangle)) \xrightarrow{D_2} \Gamma(\text{ad}P \otimes [\Lambda^{3,0}]) \rightarrow 0.$$

Atiyah-Singer の指数定理によって ([Sh], [K]),

$$h^0 - h^1 + h^2 - h^3 = -\frac{\text{ch}(\sum_{i=0}^3 (-1)^i \text{Ad}P \otimes \Lambda_{\mathbb{C}}^i) \text{td}(TM \otimes \mathbb{C})}{e(TM)} [M],$$

ここで  $h^i = \dim H^i$ ,  $H^i = \text{Ker}D_i / \text{Im}D_{i-1}$ , そして  $\text{ch}(\text{Ad}P \otimes \Lambda_{\mathbb{C}}^i) = \text{ch}(\text{Ad}P) \text{ch}(\Lambda_{\mathbb{C}}^i)$ ,

$$\Lambda_{\mathbb{C}}^i = \begin{cases} \Lambda^0 \otimes \mathbb{C}, & i = 0, \\ \Lambda^{1,0} \oplus \Lambda^{0,1}, & i = 1, \\ \Lambda^{2,0} \oplus \Lambda^{0,2} \oplus \mathbb{C} \omega, & i = 2, \\ \Lambda^{3,0} \oplus \Lambda^{0,3}, & i = 3. \end{cases}$$

左辺は  $D_i$  に関する解析的指数, 右辺は Chern 指標, Todd 類, Euler 類に関する位相的指数を表わす.

$H = U(1)$  とする. そのとき,  $h^0 = 1$ ,  $\text{ch}(\text{Ad}P) = 1$  となる.  $T_C$  を  $M$  の複素接束,  $\bar{T}_C$  をその複素共役束とする:

$$TM \otimes \mathbb{C} = T_C \oplus \bar{T}_C, \quad T^*M \otimes \mathbb{C} = T_C^* \oplus \bar{T}_C^*.$$

全 Chern 類を

$$\begin{aligned} c(TM \otimes \mathbb{C}) &= c(T_C) \cdot c(\bar{T}_C) \\ &= (1+x_1)(1+x_2)(1+x_3)(1-x_1)(1-x_2)(1-x_3) \end{aligned}$$

のように分裂原理によって分解する. そのとき, 次がいえる:

$$\text{ch}\left(\sum_{i=0}^3 (-1)^i \Lambda_C^i\right) = \text{ch}\left(\sum_{i=0}^3 (-1)^i \Lambda^{i,0}\right) + \text{ch}\left(\sum_{i=0}^3 (-1)^i \Lambda^{0,i}\right) = \prod_{i=1}^3 (1 - e^{-x_i}) + \prod_{i=1}^3 (1 - e^{x_i}),$$

$$\text{td}(TM \otimes \mathbb{C}) = \text{td}(T_C) \cdot \text{td}(\bar{T}_C) = \prod_{i=1}^3 \frac{x_i}{1 - e^{-x_i}} \cdot \prod_{i=1}^3 \frac{-x_i}{1 - e^{x_i}},$$

$$e(TM) = c_3(T_C) = \prod_{i=1}^3 x_i.$$

よって, 位相的指数である右辺は,

$$\begin{aligned} & - \left\{ \left( \prod_{i=1}^3 (1 - e^{-x_i}) + \prod_{i=1}^3 (1 - e^{x_i}) \right) \prod_{i=1}^3 \frac{x_i}{1 - e^{-x_i}} \cdot \prod_{i=1}^3 \frac{-x_i}{1 - e^{x_i}} / \prod_{i=1}^3 x_i \right\} [M] \\ &= - \left( \prod_{i=1}^3 \frac{-x_i}{1 - e^{x_i}} - \prod_{i=1}^3 \frac{x_i}{1 - e^{-x_i}} \right) [M] \\ &= -(\text{td}(\bar{T}_C) - \text{td}(T_C)) [M] \\ &= (\text{td}(T_C) - \text{td}(\bar{T}_C)) [M] \\ &= 2\text{td}(T_C) [M] \end{aligned}$$

となる. もし  $M$  が複素多様体ならば, Todd 類を  $M$  上で積分した  $\text{td}(T_C)[M]$  は算術種数に等しいことに注意する.

以上から,  $A$  の  $SU(3)$  型  $H$  インスタントンの変形モジュライの次元は, 空でないとして,

$$h^1 = \dim H^1 = -2\text{td}(T_C)[M] + h^2 - h^3 - 1$$

である.

#### 5.4. おわりに

(1)  $CP^3$  上の主  $U(1)$  束の同型類は  $H^2(CP^3; \mathbb{Z}) \cong \mathbb{Z}$  であるが, 主  $U(1)$  束のため, 他の束の  $U(1)$  インスタントンのモジュライの次元は変わらない. 通常の  $S^4$  上の  $Sp(1)$  インスタントンのモジュライの次元は  $8k - 3$  であることと比較せよ.

(2) nearly Kähler な  $S^6, S^3 \times S^3$  上の  $U(1)$  インスタントンは,  $H^2 = 0$  のため, 自明なものしか存在しない.

(3) 通常の Einstein-Kähler な  $(CP^3, g_1, J_1, \omega_1)$  上の  $U(1)$  インスタントンは, 自明なものしか存在しない.

(4) 通常の  $N = S^4, CP^2$  上の  $H$  インスタントンのそれぞれ nearly Kähler な  $Z = CP^3, F_{12}$  への引き戻しは, 概複素構造の定め方より,  $SU(3)$  型  $H$  インスタントンである.

## References

- [B] A.L. Besse, *Einstein manifolds*, Springer-Verlag, 1987.
- [C] R.R. Carrión, *A generalization of the notion of instanton*, *Diff. Geom. Appl.* 8 (1998) pp.1–20.
- [C-S] S. Chiossi-S. Salamon, *The intrinsic torsion of  $SU(3)$  and  $G_2$  structures*, *Differential geometry, Valencia 2001*, pp.115–133, World Sci. Pub., 2002.
- [D] S.K. Donaldson, *Vector bundles on the flag manifold and the Ward correspondence*, *Geometry of today*, Roma 1984, pp.109–119, Birkhäuser, 1985.
- [E-S] J. Eells-S. Salamon, *Twistorial construction of harmonic maps of surfaces into four-manifolds*, *Ann. Sc. Norm. Sup. Pisa* 12 (1985) pp.589–640.
- [H] N.J. Hitchin, *Kählerian twistor spaces*, *Proc. London Math. Soc.* 43 (1981) pp.133–150.
- [K] 小林, *接続の微分幾何とゲージ理論*, 裳華房, 1989.
- [M-I] 茂木-伊藤, *微分幾何学とゲージ理論*, 共立出版, 1986.
- [Sa] S. Salamon, *Riemannian geometry and holonomy groups*, *Pitman Research Notes Math. Ser.* 201, Longman Scientific & Technical, 1989.
- [Sh] P. Shanahan, *The Atiyah-Singer index theorem*, *Lecture Notes Math.* 638, Springer-Verlag, 1978.